ある傭兵の幻想郷訪問譚

ニャンコ太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある傭兵の幻想郷訪問譚

【Ｎコード】
Ｎ８３８７Ｙ

【作者名】
ニャンコ太郎

【あらすじ】
これはとある傭兵が幻想郷に迷い込んでしまったお話。
彼は幻想郷の中で傭兵はどのように生きていくのか……

ある傭兵の回想（前書き）

誤字、脱字などがありましたら指摘して下さると嬉しいです。

ある傭兵の回想

えぇと、一体何から話せばいいか……少し待ってくれ、今記憶の整理をしている所だ。
うん？初めから話せばいいじゃないかって？まあそうだが……お前は理解できるのか？
まあいいか、後で頭に“？”マークだらけになっても知らねえぞ、俺は話し方に何というか……ああいい、自分で言って自分で凹むのは御免だ。

まあ暇だし話してやるか……朝まで退屈だしな、退屈だからって寝るんじゃねぇぞ？

「……やべぇなこりゃ」

銃声と悲鳴がひっきりなしに聞こえる中、土嚢に身を隠している俺はそう呟くと体を少し乗り出し現状を確認する。
小さな村の家や荷車……銃弾を防げる物を盾にし森を背に戦っているのは現地のゲリラ兵、対して相手は数も武装も整った政府直属の部隊。
いくら地の利を得ているとはいえ一般人ばかりの貧相な装備しかないゲリラ兵と訓練を受け圧倒的な兵力と充実した装備の正規兵では比べるもがな、ゲリラ側が不利なのは明確だった。
じりじりとゲリラ兵は劣勢へと追い込まれていく。

「もう無理だ逃げろっ！撤退だぁっ！」

［ダダダダダダッ！］

「［ドシュッ！］ぐぎゃっ……」

「ぐぁっ！」

「ぎゃあっ！」

ゲリラの最前線で戦っていた隊長と思わしき男がこれ以上は持たないと判断したのか大声で叫ぶと隠れていた物陰から飛び出して森の方へと駆けて行く。

しかし敵に背を向けてそんな堂々と森に走ればいい的だ。彼の後に飛び出した数人の部下と共に仲良く相手の機銃にハチの巣にされ体中から血を吹き出して地面に倒れた。

……そう、ここは戦場。

そして俺は……ゲリラ側に雇われた傭兵だ。

名はカイナ・レイスター、出身地は……ヨーロッパのどこかとだけ言っておこう。

身長は百八十一、体重は六十九、目の色はブルー、髭は剃らない主義……というか戦場で剃ってる暇がないから習慣がつかなかったってだけだ。

職業は先程言った通り傭兵、基本は紛争地帯を転々としてるがその他にも密輸、誘拐、護衛、暗殺と金が手に入るんならどんな仕事でも手広くやっている。

外道だなんて言うなよ？こっちは生きてく為の技能をそっち方面しか教わらなかったんだからよ……仕方無ぇだろ？

っと、俺の自己紹介なんぞしてもしょうがないな、話を戻そう。

「おい通信兵……あんたらの隊長様からの連絡はまだか？」
「そ、それが全く繋がらないんです！敵の妨害にあっているんでしょうか？」
「ハァ……畜生が」

ガタガタ震えながらそう聞いて来る俺の横に居るまだ若い……って言っても俺も若いぜ？おっさんって年齢じゃあ無いからな俺は、せいぜい見られて二十代後半……何度も言うがもっと若いぞ？

まあそれはさて置き横でガタガタ震えてる通信兵に呆れ顔で聞いた結果がこれだ。
こっちが聞いたのに疑問形で返すなってんだ、俺だってそんな型の古い通信機なんて使い方知らねぇんだよ。
一応ゲリラとはいえ兵士なんだから落ち着けってんだ馬鹿野郎が、まあ叫び声をあげた上無防備に立ち上がって逃げ出さないだけマシか……単に腰が抜けて動けないってのもあるかもしれねぇけど。

［ドォン！］

「うおっ！？」
「ヒィッ！」

僅か数メートル隣の荷車を盾にしていた奴らが荷車ごと吹っ飛ばされ流石の俺も驚きの声をあげる。
迫撃砲まで持って来てやがるのか……ゲリラに対して随分と豪勢なモンを用意してくれるもんだ。

次々に降ってくる迫撃砲に物陰がまた一つ、一つと吹き飛ばされていきそこに隠れていた兵は悲鳴をあげる事すら許されずに死んでいく。

「指揮官が居ないぞ！」
「何だと！？」
「俺達はどうすればいいんだよ！」

それと同時に仲間内が騒がしくなる、指揮官が撤退命令も出さずに逃げたらしい……兵士が動揺するのも無理は無い、指示を出すものが居ないという事は既に俺達は統制の取れていない烏合の衆と同じだからだ。
慌てふためく兵士達、鳴り響く迫撃砲の爆発音……既に戦闘どころではない状況になってしまっていた。

「ふぅ……退却すっか」
「……え？」
「勝ち目はゼロだ。こっちは何もかもが劣ってやがる……ここに居たって無駄死にするだけだ」

俺はその光景をまじまじと見ながら大きなため息をついた、なんせ迫撃砲がある時点でこっちは地形もクソも無い。
物陰に隠れようが家に立て籠ろうが隠れている物ごと吹っ飛ばされちゃあ隠れる意味が無いだろ？
こんなポンポン物陰に落とされているんだ……多分俺が隠れているここもじきに砲弾が落とされるだろう。
そんならさっさと逃げた方が吉だ。迫撃砲が落とされる順番待ちなんて真っ平御免だからな、命はそんな軽くねぇ。
俺はそうと決めると物陰から物陰へと素早く移動して森の方へと退却を始めた。

逃げている途中ちらと周りを見てみると既に顔面蒼白で逃げている兵がかなり居る、かなり焦った表情……これは焦るというより生存本能のままに逃げ出してるって方が正しいか。
まあ逃げ出したい気持ちが分からない訳でもない、現に今俺は逃げ出そうとしている所だからな、しかしそんな相手に見えやすい所で走ると……

［ダダダダダダッ！］

「ぎゃぁっ！」
「ぐぁっ！」

……前にも言った気がするが、いい的だ。
戦場では本能に呑まれたら待っているのは死の方が圧倒的に高い、例えるなら慌てて見晴らしのいい所に躍り出て本能ままがむしゃらに逃げる獣が銃を持ったマタギに狙われて易々と逃げおおせるか……と言った所だ。
そんな哀れな屍達を背に俺は森へと向かいほぼ弾の当たらないと思われる地点まで行くと立ち上がって急ぎ森の中へ駆け込む。
こちらから戦場が見えなくなる所まで走ると足を止め振り返る、追っても無いようだしここまで来ればとりあえずは安全か……しかし今回の依頼は色々と依頼主の言っていた事との相違点が多かったな。
まあこの稼業を続けているあたりこんな目に遭うのは良くある事なんだが……

とりあえず依頼主かここの指揮官を殴らんと気が済まねぇ、こいつは明らかに故意だ。
こっちはビジネス、金で雇ったからといって使い潰されてはいそうですかという訳にゃあいかない。

それが裏で黒い取引がなされた巨大な傭兵供給機関ならともかく俺のように部隊も持たず小規模、または個人でやってる奴等にとっては文字通りの死活問題だ。

「ふぅ、ふぅ……待ってくださいぃぃ〜〜」

「あ？お前生きて来れたのか」

「ひ、酷いです……何とか運良くここまで来れました」

そんなやり場のない怒りでもやもやとしていると先程俺の隣に居た通信兵がよたよたと走って来た。

良くこんな走りで撃たれずに済んだもんだ……慌てて逃げる奴よりもインパクトがあったぞ今の走りは。

俺の近くまで来ると立ち止まりゼイゼイと肩で息をする通信兵、背中を見てみると穴だらけになり煙をあげている通信機……うむ、通信機は彼を守って名誉の死を遂げた訳か。

慌ててこのクソ重い通信機を捨て忘れたお陰で命を拾ったか、運がいい奴だ。

「運がいいな、逃げ足を遅くする通信機を背負ってたお陰で助かるたぁな」

「え？通信機は重いから捨てた筈……あれ？」

「おいおい……」

呆けた顔で背中に背負った通信機を触って間抜けな声を出す通信兵……ああ、阿呆なお陰で助かったのか。

まあこういう奴は意外と生き残ったりするからな……全く不思議なもんだ。

「あ、あれ？脱げない！？一体どうなってるんですかこれ！」

「……まずは腹に巻いてあるベルトを外せ」

「あ……」

そんなこいつのどこか間抜けな姿を見て俺は心が幾分か和らいだ。
こいつ戦場に一人いればＰＴＳＤになる兵士減るんじゃねぇか？
いいムードメーカーになりそうだ、まあこの間抜けさがコイツに牙を剥く可能性の方が圧倒的に高いんだろうがな。

そんな事を考えている俺の横で何故かベルトと格闘している通信兵に苛立ち持っていたナイフでベルトを切ってやった後俺は頭を切り替えこの後の事を考える。
今や銃声は微かにしか聞こえない。銃声が聞こえないような距離まで逃げたとは思えないのでこちらが撤退したと考えて間違い無いだろう。
しかし指揮官が居ないとはいえ全員と足並みを揃えて逃げ出さずに来た訳だ。当然俺は此処の土地勘なんて無い。隣に居る奴は完璧に役に立たねぇ、断言出来る。
この状態だと下手をすると森の中を数日間彷徨う羽目に……というか死にかねない、それは避けたいもんだ。

「まあ運を天に任せてこの森を抜けるしか……」
「アニキ！アニキィ！無事でしたかぁ！」
「ん？その声は……」

そう思っていた俺の耳に聞き覚えのある声が聞こえたかと思うと草陰をかき分けて大柄の筋肉質の黒人男性と多数のゲリラ兵が現れた、どうやら無駄な心配だったようだ。
俺をアニキと呼んだ大男は涙目になりながらその小さめの丸太のような腕で俺の肩を掴む。

「アニキィィィ！いつの間にか居なくなってたから心配してたんで

すよ！」
「［ミチミチ……］うぐぉっ！」
ミシミシと俺の肩が危険信号を発している……心配してくれたのは嬉しいが力加減を考えろ馬鹿と言いたい。
「そろそろ止めねぇと骨が折れるんだが……」
「あ、すいませんアニキ」
はっと我に返ったような顔をして腕を離す大男、毎度力加減は考えろと言ってる筈なんだがなぁ……
……ん？こいつの名前が聞きたい？
こいつの名前はベン・カーヴァー、言った通り黒人の大男だ。
身長は確か二メーター二十四センチだったかな？頭に巻いたバンダナがチャームポイントだ。
そのバンダナなんだが実はかなり色褪せちゃあいるがこいつの国の国旗なんだが……その事は言わないでやってくれ、あいつは母国があんまり好きじゃないんだ。
嫌いになる程って一体どんな国かって？そうだな……“正義と平等”って言葉が銃声と殺戮の上で叫ばれる国……って感じの国だ。
何でそんなもん付けてるかって？……形見があれだけなんだとよ、肉親のな。
まあそんな事はどうでもいいだろ？知った所でここじゃあ何の役にも立つもんじゃあ無いからな。
こいつの特技？……力仕事だな、こいつに力仕事をさせて右に出る奴は早々見つからないぞ。
聞いて驚け、こいつはベンチプレス四百二十キロの記録持ちなんだ。
……反応が薄いな、良く分からないか？まあ分かりやすく言えば普

通の男の数倍の力を持ってるって考えりゃあいい。
コイツの肉体の異常な硬さは身をもって味わった訳だから説明は要らないか。
火力の高い銃を至近距離から食らわすか急所にぶち込まねぇ限りこいつに致命傷なんて無理な話だ、全くこいつのタフさを見てると実はターミネーターなんじゃねぇかと思う時があるぐらいだ。
……あぁ、その反応はターミネーター知らねぇな？まあこんな辺鄙な所じゃ電波放送なんてやってる訳ねぇか。

あいつの紹介はここら辺までだ、本題に戻るぞ。
弟分のカーヴァーと撤退したゲリラ兵に合流した俺達はその後本隊へと合流を果たした。

「やっぱり俺達は捨て駒だったか……」
「みたいですねアニキ」
「まあ行き帰りぐらいの路銀は持ってる、今回は運が悪かったと思って帰るか」

本隊……と言う名の指揮官クラスのみの部下に知らせず撤退をしていた奴等と合流して数分後、おれはそいつらと“話し合い”をした結果一枚の報告書を渡して貰う。
俺は指揮官が持っていたお偉いさんからの報告書を一通り見た後握りつぶすと近くにあった藪に抛り捨てた。
その報告書の内容はまあ分かり切っていた事だが……俺達を捨て駒にする事が書かれていた。
通りで戦い慣れてないというか……素人臭さが抜けてない連中ばかりだった訳だ。戦力になりそうにない奴をかき集めて作ったんだか

らな。
始まってもう長くなるこの紛争地帯にしては妙だと思ってはいたんだがな……まあ終わっちまった事をグダグダ言ってても意味は無ぇ、過去を振り返るのは大事だが過去ばかり見つめて固執しちまってても前に進むことは出来ねぇからな。

「こ、これは我々の勝利のために必要な犠牲なのだ！よそ者のお前が偉そうに［ガスッ！］えぐぅっ！」
「ふ～ん、へぇ……で、あんた等は勝利の為、俺達が犠牲になってる間にとっとと逃げて作戦完了しようとした訳ですかい……」
「ぐふっ……ゆ、許してくれ……上の命令には逆らえな［ドガッ！］えぐぅ！」
「ったく、ただのカスじゃねぇか……国民の権利の回復を願って反乱した奴等がその立ち上がった奴等を道具同然に使い捨てるたぁ……ここの政府と同じ穴の貉じゃねぇか」

因みに俺が受けた依頼の内容はゲリラ軍を援助してくれって奴だった、こいつを終わらせば報酬金を貰えるはずだったんだがなぁ……。ここの任務は住民が居なくなった廃村の一つに駐屯している補給部隊を潰す……というものだったのだがその実そこに居たのは小部隊などでは無く反乱軍の作戦で引きずり出された掃討に向かってる装備万態の大部隊。
俺達を囮にして手薄になった拠点を奪取するという作戦だったらしい。

ったく、最後の最後でこんななんてなぁ……働かせるだけ働かせて金も払わず使い捨てる気満々だったって訳だ畜生。
覚えてろよこの野郎（クライアント）、国に帰ったら政府軍にてめえ等の情報売ってぶち殺しにいってやる。

しかしこのゲリラ軍には他の部隊に俺の同業者の知り合いがいくらか居たんだが……大丈夫かねぇ。
……まあ死にそうになってもなんやかんやで生き残りそうだ。悪運強い奴等ばかりだからな。

……話を戻そう。俺達が捨て駒にされるのは隊長クラスの上官以外は知らなかったようでその事実を知った彼らは俺がそいつ等を殴ろうが蹴ろうが恨みのこもった目で見ているだけだった。
まあ当たり前だわな、こいつらは政府の腐敗に目を当てられなくなり国に反旗を翻した連中だ。
少々やり方が横暴すぎるとはいえこの国の未来を憂いて立ち上がった奴等だ、こいつらはそんな彼らの思いを踏みにじったようなもんだから当然と言えば当然の報いだろ。

まあこんな事したのはは思いっきり私情が入ってたからなんだがな……前に過去云々言った気がするが我ながら未練タラタラだぜ。
いや、未練と過去は違う……と思っておきたい。
あ？同じだろうって？……そこは黙っておくもんだぜ。

「さて、あんた等はどうする？」

俺はほぼ原形をとどめていない程に膨れ上がった上官共を一瞥するとゲリラ兵達の方を見た。
皆意気消沈したような顔で俯いたり涙を流したりしている。
そしてその中の一人が意を決したように顔を上げて一歩前に出た、そして俺の顔をキッ、と見つめる。

「我々は……彼らを連れて拠点へと帰還します」
「なんだ、こいつらは置いて行かないのか？」

「このような者達でも同志であり、上官であります故……」
「難儀だねぇ、こういう組織ってのはどこも」
兎に角俺はここで離脱だ。報酬は貰いそびれたが、生き残るのに重要な情報を正しく伝えないような所に帰るなんて真っ平御免だからな。まあこんな作戦に出すような奴等だから元から金なんざ払うつもりも無かったんだろうが……
わざわざこんな所で仕事するよりも割安にはなるものの仕事をくれるクライアントはいくらでも居る。

「それじゃあ俺は比較的安全なお隣の国まで逃げるわ」
「そうですか……ご武運を」
「それ普通俺がお前らに言う台詞じゃねぇか？」

そう返すと笑い声がおきた。こいつらの行く末はどうなるか知らないが今は自分の心配だ、暖かい風呂と美味い飯を求め俺は上官からかっぱらった地図を基にゲリラ兵達に背を向けて国境へと足を向け……

［ガララララララ……］

「……ん？」

俺はゲリラ兵達の後ろの方から聞こえる僅かな音に耳が反応する。遠くから聞こえるこの音は……分からない筈が無い、藪や樹木を無理矢理へし折る音と共に近寄って来るこの音は……キャタピラの音だ。
間違いなくこちらに向かってきている、段々と大きくなる音は嫌でもゲリラ兵達の耳にも入ったらしくこの地鳴りのような音に動揺している。

「嘘だろオイ！」

戦場、キャタピラ音……導き出される答えは一つ、そう……戦車以外無い。

これで作業用ブルドーザーが出てきたら盛大にずっこけてやるところだが音の正体を確認するまでボーッと突っ立っている訳にはいかない、戦車とやり合うならジャベリン……いやせめてＲＰＧを持った歩兵が居なきゃあ相手にもならない。

「てめぇら逃げろ！」

俺がそう叫ぶと同時に茂みの奥から飛んできたのは鉛玉、一点に固まっていたゲリラ兵達は次々と撃ち殺されていく。

それと共に踊りだしてくる数十人の政府軍の兵士と木々をなぎ倒して現れる戦車……そして続くように現れる装甲車……ってどんだけ殺しに来てんだこいつ等は！歩兵しかいないゲリラ共に対する武装じゃねぇだろ畜生めが！

「うわぁぁぁぁ！」

「ひぃぃぃ！」

「なっ！？てめぇらなんでこっちに来んだ畜生！」

［ガララララ……］

「うおぉぉぉぉ！！」

その中で何とか弾を避けた兵士達が俺の方へと走って……って待ちやがれ！逃げろと言ったがこっちへ逃げろとは一言も言ってねぇぞ！しかし逃げてきてしまったものは仕方が無い。俺はゲリラ兵達を先

導するようにがむしゃらに森の奥へ奥へと逃げ込んで行った。

その時注意してりゃあ分かったのかも知れねぇな……
生い茂る木が、踏みしめる地面が、俺達の周りにある空気全てが……
……いつの間にかガラリと全部変わっちまってた事に。

真夜中の逃避行

「はぁ……はぁ……」

どれ位走ってたのかは覚えてねぇ、だが既に銃声も戦車のキャタピラ音も聞こえなくなっていた。
俺達は足を止めると息を整える、俺は後ろを振り返り共に逃げてきたゲリラ兵を見る。
……十九人か、逃げ始めた頃に比べて大分減ったな……はぐれたかあるいは奴らの銃弾の餌食になったか、まあ生きている事を願っておこう。
月明かりに照らされた彼らの顔は既に憔悴しきっていた。無理も無い、こんだけハードな事が立て続けに起こってぐったりしない方がおかしいってもんだ。
……しかし何か違和感を感じる、その理由は何だろうと木々の間から覗く星空を眺める。

うむ、今日は満月か、曇り一つない空は美しいまでの……って待て。

「ま……満月だとぉ！？」

そう、星空、月……夜とはいったいどういう事だと俺は思うだけに留まらず大声でそう叫んじまった。
何で驚いたかって？そりゃあ決まってるだろ……逃げる前までは確か午後三時～五時あたりだったんだ、曇りかけてはいたが太陽がさんさんと俺達の頭上で輝いていた筈だったんだよ。
しかし今俺達の頭の上で輝いているのは太陽じゃ無くまん丸のお月様……位置的に考えてどう考えても深夜近くだ、明らかにおかしい。

俺達が走ったっていっても時間はせいぜい多く見積もっても二十分そこら、数時間も全力で走り続けられる程俺はタフな生き物じゃあ断じて無え。

「ア、アニキ……これは一体」

「カーヴァー、言いたいことはよく分かるが……俺にも分かんねぇよ」

落ち着いてみると周りの木々や地面、俺達の周りの空気にも違和感を感じた。

どうやらここは俺たちが居た所と丸っきり環境が違うようだと俺は即時に理解した。

しかし理解したが理由は分からない、もしかしたら何か特殊な条件でこの場だけ環境が違うのかもしれない。

しかしいきなり夜になっていた事は微塵も説明がつかない……ああ畜生どうなってやがんだ一体！

まあ俺はその手の専門家な訳じゃねぇし知識も無い奴がそんなこと考えたって無駄だ、学会に長ったらしい文章が書かれたレポートを提出して発表しようって訳じゃ無いんだからな……

俺は早々にこの異常現象の理由を探る事を切り上げ当面で解決できる問題に切り替えた。

「［チャッ……］そこの隠れてる奴、出てこい」

「あれ？なんで分かったの？」

俺が拳銃を剥けた先から聞こえたのは少女の声だった。

俺達が足を止めた少し後あたりからずっと気配を感じていたんだがあちらさんからの動きが全く無いもんでこっちが先に動いたんだが

……ふむ。
予想と少し……いや大分違う姿に面喰いながらも俺は闇の中からまるで浮き出るかのように現れた少女を見る。
ショートカットの金髪に赤い眼、どう見たって子供だ……俺に向けている殺気以外は。

「分かられたくないならまずその殺気をどうにかしろ」
「獲物に殺気を向けちゃ駄目なの？」
「向けちゃいけない訳じゃあ無いが臆病な獲物だとすぐに逃げちまうぞ？」
「大丈夫だよ、逃げられても追い着けるもん」

そう言ってにかっと笑う少女……かわいいなオイ。
しかしその自信は一体どっから湧き上がって来るもんなんだか……
てか獲物って何だ獲物って。
俺は明らかな敵意を持って武器を向けてるってのにそれがどうしたとばかりの雰囲気を醸し出しているこの少女に俺は言い知れない不気味さを感じていた。
それに彼女の俺達を見る目……まるで肉食獣が草食獣に襲い掛かる時のそれだ。

「随分と自信ありげな顔で言うじゃねぇか、ちなみに俺はかけっこは得意だぜ？」
「そんな疲れたような顔で言われても説得力無いよおじさん」
「おじさんじゃねぇよ！これでもまだお兄さんって呼ばれる歳だぞ、口髭でおっさんって決めつけるな」

因みにこの時俺は言葉では余裕な感じを出してはいるが内心は冷や汗ダラダラだった、
師匠に叩きこまれた鉄仮面と見た目に騙されるなという教訓がこん

な所で生かされるとは思わなかったよ本当に。

「所でお兄さん、私に向けてるそれは何？」
「あ？こいつは拳銃だよ……ブレン・テンって名だ」
「けん……じゅう？」
「拳銃を知らないのかよ……」

……うむ、拳銃を恐れて無いんじゃあ無く拳銃を知らなかった訳か、そりゃあ驚きも警戒もする訳が無い。
ちなみにこいつは昔……まだ俺がガキだった頃身なりの良さそうなジジイの将校から戦利品として持ち帰った品だ。
周りの奴らは骨董品だと笑っていたが初めて自分の物となった銃という事で今でも俺の愛銃だ。

……って“何それ？”みたいな顔をされても困るんだがなぁ、聞いといて無反応だとこっちが反応に困るじゃねぇか。
まあ普通の餓鬼が銃に詳しいってのもおかしいもんだが……銃の存在ぐらい知っててもいいだろうに。

「あの、アニキ……まずこんな所にガキが居る事に突っ込まなくていいんですかい？」
「うん？……そういえばそうだな」
「アニキってほんと自分のペース崩さないっすね」

今まで俺と少女のやり取りを静観していたカーヴァーが恐る恐るそう切り出してきた。
……そんな当然な事を突っ込まなかった俺は相当焦っていたのだろう、我ながら恥ずかしい。
何？焦ってるように微塵も見えなかった？当たり前だ、弱みになるような事をわざわざやるなんて馬鹿な事するかよ。

ふむ、冷静に彼女の姿を見てみるとこの森の中、それも夜の夜中で現地民が着ないようなデザインの服、それもあまり汚れていない……考えてみれば不自然な点がありすぎるな。
それになによりもこの殺気、とてもこの年齢の子供が出せるようなものじゃあ無ぇ。

「さて、質問には答えてやったから今度は俺の質問に答えて貰ってもいいか？」
「あと一つ質問！」
「……どうぞ、お嬢さん」
「あなたは取って食べれる人類？」
「あぁ！？……無論食おうと思えば食えるぞ、食えるんならな」
「そこは問題ないよ、何人も食べてるから」
「……」

少女の口からトンデモ発言が出やがったがそこは大真面目に答えてやる。
どんな時でも動じず対応を……傭兵業界でもトークスキルってのは必要なもんだ。
……主に厳つい依頼者（クライアント）様の近くで物騒なモン持ってる奴等に重圧をかけられながら報酬の取引をする時とかな。
しかしまるで当然と言った感じの返しを聞いた時流石に受け答えは出来なく俺は言葉を失ってしまった。

「お嬢さん、少し後ろの奴等と話す時間を貰ってもいいかい？」
「うん」

俺は表層は平静を装いながらカーヴァーの後ろに居る兵士達の方に向かう。

そして彼らに対して質問を一つ。
「お前らの国には食人の習慣(カニバリズム)はある、またはあったのか？」
「いえ」
「無いです」
即答だった。
俺はその答えを聞くと再び元の位置に戻った、無論銃は彼女に向ける。

「よし少女、一つ質問だ……」
「うん、早くしてねお腹ペコペコだから」
「よ～しじゃあ単刀直入に聞こう、君が今その空腹の対象にしているのは俺達か？」
「うん」
「何で俺達なんだ？他の食い物じゃあ駄目なのか？」
「む～……お兄さん質問は一つって言ったのに～」
「残念ながら君は俺に三つ質問をしている、だから君にはあと二つ質問に答える義務がある」
「そーなのかー」
「そーなの」

決めた覚えなんか微塵も無いけどな、なんか肯定したら普通に納得してくれた、こちらとしては嬉しい限りだ。
それで『そんなの聞いてないもん！』とか言われて襲われてたらどうなってた事か……今更だからこそ言えるが運が良くて大怪我、下手をすりゃ喉を食いちぎられて即死だった可能性も否めねぇな。
俺の少女に対する嫌な予感を信じてたお陰で助かったと思うよ本当に。

「貴方はお腹が減っている時に目の前にご馳走が並んでて見逃す事なんて出来る？」

中々上手い例えだ、彼女が俺達をどういった感じで見ているのかよ〜く分かった。
かの有名な『無人島』でロビンソン・クルーソーのフライデーも味付けされた肉を食っても人肉が一番と言う意見を曲げなかったらしいしな。
もしかしたら人肉と言うのは相当美味い物なのかもしれない……まあ食う気なんざ更々無いが。

しかしこのままでは俺達はこの少女のディナーとなってしまう可能性がある。
本当に食われないため……それに後ろのゲリラ兵共に被害を及ぼさせない為俺は思考を巡らせ一つの結論が出た。

「よーしカーヴァーを食っていいぞ、あの黒いお兄ちゃんだ！」
「わ〜い！」
「えぇ！？アニキィ幾らなんでも［ガブゥッ！］アァーウッッッ！！」

俺のゴーサインと共に命令された警察犬の如く素早くカーヴァーの元に接近すると奴の喉仏に食らいつこうとした。
しかしとっさにカーヴァーは腕でガードしそのまま腕に噛り付く少女。
その勢いで数歩後退するも踏み止まり体制を立て直す、あんな華奢な体であいつを体当たりで後退させるとは凄い力だ。
これがこの少女の実力か……間髪入れずあのスピードで突っ込まれていたら俺は銃の引き金すら引けずに食らいつかれていただろうな。

「あぐ……ん？」

そして彼女がカーヴァーの腕に食らいつき数秒、普通の人（えもの）とは違う違和感を感じたらしい。

……まあ当然だろう、あいつの鋼に例えられる程の筋肉と皮膚じゃあな……ワニに噛まれても大丈夫！とか笑いながら本当に噛まれて大丈夫な馬鹿野郎だからだ。

何でそんな異常に頑丈なのか説明は出来ない……検査なんかした事ねぇしする金も無いしな。

特殊な人間とかで一生研究室に閉じ込められるなんて喜ぶ訳が無い。

「よ～しカーヴァー、その少女をホールドして回収するぞ」

「あ、はいアニキ」

「［ガシッ！］うわわっ！」

少女はカーヴァーに片腕で抱えられあわててその拘束から逃れようとするが奴の腕はびくともしない。

……まあ当たり前だわな、こんな少女が片腕で二百キロ超の物を持ち上げられる腕に拘束されているんだ、逃れろって方が土台無理な話だろう。

大の大人の俺でもあいつに拘束されたら抜け出せる気がしない。

何で拘束したかって？そりゃ決まってるだろう……

［ガサッ……］

「……」

先程から物陰に隠れ俺が隙を見せないかと伺っている獣共から守る為だ。

俺達を食う気だった少女を守るってのはどうかと思うかもしれねぇが敵意じゃ無えし……
何よりもこの少女を捨て置いて獣に貪り食われるって結果になるのはいい気分じゃねぇ。
獣共は距離にして約二十メートル、森の中で、更に夜という獲物を奇襲するには好条件な訳なのだが……甘いな、気配を消しきれてない。
まあ周りの奴らは気付いていないようだがな……まあ攻撃される前にさっさと始末しちまうに限るな。

「死ね［ダン！ダンダンッ！］」

俺は少女に向けていた銃をそいつらが隠れていると思われる方に向け発砲した。
一発目は手ごたえがあったが残りは外したようだ。
流石に気配で大体の位置は探れるが的が見えないのに急所をぶち抜くなんて神がかり的な事は出来ない。
コイツで逃げ出すかと俺は思っていたが読みが甘かった……俺はせいぜい二～三匹程度かと思っていたんだが予想をかなり上回る数が居たようで十数の気配がこちらに向かって近づいて来ていた。

「全員武器を構えろ！」
「え？……ギャッ！」
「「「！！！」」」

慌ててゲリラ兵達に指示を出すが時すでに遅し、一番奥に居た兵が何者かに食らいつかれそのまま藪の中へ引きずり込まれていった。
ゲリラ兵達の顔が一瞬で凍りつき動きが止まる……ったく馬鹿な奴等だ、動かなかったら狙われやすくなるだろうに、自分から獣の餌にでもなるつもりなのかこいつ等は！

「……っ！［ドォン！］」
「グギャン！」
俺は心の中でそう叫びながら次に藪から飛び出してきた獣の頭部に鉛玉をぶち込んだ。
そして飛び出した勢いのまま頭を破壊された獣の体はバランスを失い錐揉みしながら地面に落下し転がった。
地面に転がった獣の正体は木々の間から差し込む月明かりのお蔭でその獣の姿が良く見えた。
「……なんだこりゃ？」
俺がその獣をちらりと確認すると獣だと思っていたのが地面に倒れていたのは……何とも言い難い形をした生き物だった。
ゲームに出てくる犬型クリーチャーを現実的に……更にグロテスクにしたような姿だった。
こいつは奇形なんだろうか？醜悪と言う言葉がしっくりくるような姿のそれから目をそらすと俺は拳銃を仕舞い肩に背負っていたアサルトライフル構える。
「グルオゥッ！」
「なっ！？クソがっ！［ドドドドドドッ！］」
「ギャグゲェッ！！」
俺が背を向けた瞬間突然頭をぶち抜いて死んだと思っていた獣が起き上がりこちらに襲い掛かってきた。
確かに打ち抜いた筈なのに何故起き上がったのか……まあそんな事を考える前に素早く振り返り引き金を引いて頭をハチの巣にしてやった。

断末魔と共に短い痙攣をして動かなくなるバケモノ犬、既に頭の半分がグシャグシャになっているので流石にもう起き上がっては来ないだろう。

このライフルの名前は……え？別に知りたくない？……そうか。

いや！別に銃の自慢が出来なくて残念だとは一切思ってねぇからな？

「［ダダダッ、ダダダッ！］全員集まれ！バラけてたら一人ずつ殺られるぞ！」

俺は物陰から狙っているバケモノ共に向かって威嚇射撃をすると兎に角どこか見晴らしの良い所へ移動しようとゲリラ兵共を呼び集め一塊になって逃げ出した。

政府軍から逃げ出せたと思ったら次はバケモノの群れ、本当に厄日だって思ったぜ。

俺達に向かってくるバケモノ共を銃でおっ散らしながら俺達は逃げ続けた。

しかし力尽きたり思わぬ所から奇襲、銃で怯ませられず突っ込まれて餌食になったりと徐々に徐々に数を減らしていった。

結果俺達が見晴らしのいい場所まで運良く到着するまでに俺達の数は僅か数人になっていた。

どうやら廃村の一つだったらしく背の高い雑草がかなり生えておりボロボロの民家等が何件か建っている。

どうやら廃村になって久しいらしい。先程俺達が戦闘していた村のように紛争のせいであるのかそれともこのバケモノのせいであるのかは定かで無いがそんな事はどうでも良かった。

「うらぁ！［ガシャァン！］」

俺は一番近くにある民家まで走っていくと勢いをつけて戸を蹴り開け……ようとしたが戸は枠から外れそのまま奥へと倒れた。
一応は入れるようにはなったが……これじゃあ奴らが入ってきちまえるじゃねぇか馬鹿野郎。
どうやら引き戸の類だったらしいな……家の様式が先程の村と違っていたようだ。
……どうみてもここ周辺の国々の様式じゃねぇぞ、本当にここは一体どうなってやがるってんだ？

「ギャァァッ！」
「グルゥガァァァ！」
「……ッチ！全員この中に逃げろ、立て籠もるぞ！」

まあそんな事を考えてる暇があるならさっさと生き残る方法でも考えた方がこの場では幾分か実用的な頭の使い方だな。
俺はゲリラ兵共を先に入れると開けっ放しのドアの前に陣取る。
本当は何人か一緒に居れば安心なんだがゲリラ兵共は逃げるので精一杯って感じだったからな、正直こんな所に置いといてもカカシ以下の働きしかしないだろう。

「［ダン！ダダダッ！ダンッ！］……ふぅ、いい的だぜ全く」

俺は近づいて来るバケモノ共を順番に、確実に頭をブチ抜いて黙らせていく。
起き上がった奴は念入りに弾を撃ち込んでやった、どうやらこの獣共は非常にタフらしい……ほとんどの奴が頭をぶち抜いた程度じゃああの世に行かなかった。
何匹か犬じゃねぇ……人型とかそういうのも居た気がするが気にしている場合じゃあ無かったんで突っ込んで来るやつは全部片づけた。

仲間だったら……とは一瞬思ったが仲間だったら目を不気味に光らせながら万歳ポーズで襲って来ないだろう。
……まあどちらにせよ死体を調べるのは明日でも遅くは無いな。

「……ふぅ」

俺は敵の気配が一切無くなった事を確認すると一息ついて銃を下した。
やっと一息つける、そう思うと一気に疲れが出てきた俺は蹴り倒した戸を立て付けると家の奥へふらふらとした足取りで入った。
流石に足の限界って奴だ、気を張ってたのもあり精神的にもかなり疲れていた。

「てめーら無事か？」
「アニキ！」
「ええ何とか……」

屋根の所々が抜けているのか天井から月明かりが差し込みうっすらと明るい部屋の奥では床に座りぐったりしている生き残りのゲリラ兵二人と未だ少女をホールドしたままのカーヴァーが居た。
結局生き残ったのはたったこれだけか……随分と数が減っちまったもんだ。
そう思いながらも軽口を叩く程の気力も残っていなかった俺は無言でその場に座り込む。

「外……静かになりましたね」
「ああ、全部片づけた」
「流石ですね……」

ゲリラ兵の一人が絞り出すようにそう呟く、かなり疲れてそうだな

……俺も死ぬほど疲れたが。

「褒めても何もでねぇぞ［ギチッ］……糞が」

……床が木の板では無く枯れてボロボロになっている草のようなものを編んだ床だった為座り心地は最悪だった。
何でこんな床なんだ。こんな床見た事も無いぞ、一体何処の辺境民族が使っていやがるんだ？
これじゃあ靴が汚れているときに入ったら掃除が大変だろうに。雨の日が続いたらあっという間に床が腐っちまうぞ？現に少しかび臭い。

「アニキ、こいつどうしましょう？」
「ああ、もう降ろしていいぞ……お前も立ってないで座れ、疲れただろ？」
「ういっす［パッ］」
「うわわっ！」

カーヴァーは抱えている少女を下ろすと自分もどっかと床に座ってあぐらをかき……見る見るうちに不満そうな顔になった。
どうやら奴も俺と同じ考えらしいな、生き残ったゲリラ兵は……ぐったりと死体のように壁に寄りかかって眠っていた、バケモノが居なくなった事を聞いて緊張の糸が切れたのだろう。
しかし既に床だとかそんな事を考えられない程疲れていたらしいな。
まあ元は一般人だ、こんなハードな状況には普通慣れていないのが当然の事だろうからな。
……紛争地帯を渡り歩いてきた俺でもバケモノに追われるっていうハードな体験はした事は無いが。

「で、どうしますアニキ？」

「どうもこうも無ぇよ、こいつらがこのザマだ……ここで休憩しよう」

彼等もそうだが俺達も結構疲れている、眠る……とまでは危険なのでしないが体を休めた方が得策だろう。
視界の悪い中外を出歩ったりしたらまたあのバケモノの類に襲われて今度こそ全滅しかねない。
この時間帯からしてあいつらは夜行性である可能性が高い、行動するなら明日の朝がいいだろう。
しかし時差ボケと言う奴なのか疲れはしても真夜中だというのに眠くは無い、まあこれも好都合だ。
あいつら以外バケモノは居ないという保証はどこにも無い、俺たちが居るという事を嗅ぎつけられる可能性だってあるのだ。
こんなボロ屋だ、あのバケモノの体当たりなんかで壁等がぶっ壊れる可能性だって無い訳じゃあ無い。
そんな時に眠ってて対応が遅れたら目も当てられないからな……それに彼女の事もあるから気が抜けない。

「ねぇねぇお兄さん」
「あぁん？」

そしてその少女がてこてことこちらに寄ってきて俺に話しかけてきた。
俺は気だるげに返事をし見上げるようにその顔を見る。
夜の闇の中紅く光る双眼で俺を見つめる彼女の顔……面白いもん見るような顔をしやがって。
しかしこいつ……本当に人なのだろうか？そんな疑問が俺の頭をよぎった。
笑わないで聞いて欲しいんだが……俺は気配で大体それが何であるのか特定できるんだ。

戦場で少しでも生き残る確率を上げたいなら覚えろって言われて無理矢理な、あの訓練は二度とやりたくないもんだ。
まあそれでなんだが……この少女の気配がどうしても人間の物じゃ無いように思えちまうんだよ。

「お兄さん強いんだね」
「一応並の奴等なんか目じゃないくらい強いって自負はあるぞ」
「ふぅん……」

俺に興味津々と言った感じで少女は俺の隣まで移動するとちょこんと座りこむ。
そしてニコニコした顔で俺の事を見てくる。既に殺気は無くこちらを襲う様子も微塵も無いので俺はさして警戒する事も無く横目で彼女を見る。

「お兄さんはさ、私の正体分かってるでしょ？」
「……何となくはな」
「私を恐がったりしないんだね、普通私に会った人は一目散に逃げるっていうのに」

少女の言葉で俺の中にあった疑問が確信に変わった。
やはりこいつはあのバケモノと同類だったか……しかし随分とファンタジーなもんだ。
だとすると俺はこいつらの仲間を殺っちまったって訳なんだが……彼女の態度を見ている限り別に気にしてはいないようだな。

「恐がるかよ、戦車やガンシップ、攻撃ヘリに比べりゃ子供サイズのバケモノなんかかわいいもんさ」
「なにそれ？」
「人をゴミのように……遊び感覚で殺す事の出来る武器だ」

「ふーん……お兄さんそれと戦った事あるの？」
「ガンシップは三度、ヘリは十数回、戦車は……数えきれねぇな」
しかしこの少女は何でこんなに面白そうに俺の話を聞いてるんだかさっぱり分からねぇ。
俺が話してる事なんざ分かっちゃいないに決まってるってぇのに……そこまで他人とのコミニケーションに飢えていたのだろうか？
それともただ興味を持ったからか？まあどちらでもいいか、朝までは長い……こいつと無駄話をして朝を待つってのもいいかもしれない。

「所でお兄さんは何処から来たの？ここら辺じゃあ見ない服だけど」
「今更その質問か……まあいいか、それじゃあここまで来るまでの話をしてやるか、えぇと、何から話せばいいか……」
「初めから話せばいいじゃない」
「まあそうだが……お前理解できるのか？」
「う～ん……どうだろ？」
「……まあいいか、後で頭にハテナマークだらけになっても知らねぇぞ」
「わはー」
「何だその独特な返事は」
こうして俺は少女相手にこれまでのいきさつを話し始めた……

「……って訳で今の状況に至る訳だが」

「くぅ……すぅ……」
膝が重いなと思い視線を落とすと案の定そこにはかわいい寝顔の少女の頭……畜生、俺の膝を枕にして寝やがったなオイ。
呆れながらも天井を見ると差し込む光が明るくなっていた。既に既に空は白んでいるのだろう。
カーヴァーに言って外を見てこさせようとしたが寝ちまっていた……どうやら俺が外の確認をするしかないようだった。

「よっと、ごめんよ」
「んみゅ……」

流石に腐った床の上に頭を置いてやる事は出来ないので腰に巻いていた上着を枕代わりにして床に寝させた。
全く気持ちよさそうに寝やがって……しかし何時の間に膝枕にして寝てやがったんだ、全く気付かなかったぞ。
これだからまだ一流じゃねぇなんて怒鳴られるのかねぇ、一流の道は遠いな……

「よっ……ん？ふんっ［ガラッ……ガタンッ！］うおぉっ！」
やはり立て付けが悪いな……動かない戸を力任せに開けようとしたら外れてこっちに倒れてきやがった。
俺は倒れてきた戸を支えると入り口の脇に立てかけて外に出た。

「……うぉう」

朝日を浴び、外に出て最初に嗅いだ匂いは素晴らしき大自然の匂いでは無く……死臭だった。
まああれだけ家の目の前でバケモノ殺しときゃあそうなるのも当然

か、既に家の前では死臭に引き寄せられた虫達のパーティー会場と化していた。
俺は虫共には一切目もくれず一体一体死体を確認していく。
……やはりだ、このバケモノ共全部姿が違っている。爬虫類、鳥類、人型……とにかくいろんな形をしていた。
どれもこれも普通じゃあり得ないような生物ばかりだ……夜闇で良く見えなかったが俺はこんなものと戦っていたのだと思うとゾッとする。

「……お兄さん」
「［ビクッ！］うおっ！？何だ少女……ぬおっ！？」

そんな物をまじまじと見ていた時に後ろから少女に声をかけられ少し動揺しながらも振り向いた俺は更に面食らった。
少女が居る……と思われる場所に黒い球体がふよふよと浮いているのだ。
一見すると黒い靄のようだが……一体何だってんだありゃあ！？

「驚いた～？」
「なっ！？……やっぱお前なのか？」
「そーだよー」

……頭がおかしくなりそうだ。
俺の頭は既に現状に追い着いて行けない程混乱しているってのに更にこれだ！
肉体的に殺せないから精神的に殺そうってのか畜生！

……落ち着け俺、騒いだところでどうにもならないのは目に見えてるじゃあないか。
ここは落ち着いて……そう、流れに身を任せるのが一番だ、うむ、

そうに違いない。

「で……一体何の用だ？同胞を哀れみにでも？」
「ううん、お腹減ったからご飯食べに行くの」
「……俺達は食わないのか？」
「食べられたいの？」
「出来れば遠慮したいな」
「じゃあ食べないっ」

全くこの少女は何を考えているんだか分からねぇな……黒い球体に包まれてて表情が見えないから分からないとかじゃないからな？
まあ多分残酷な程無垢な笑みで笑ってるんだろうな……

「所でこの近くに集落とかは無いか？」
「ん～？えっとね、ここからこっちに行くとあるよ！」

そういって黒い球体から顔と手を出すと集落があるという方向を指差した。
良かった、一応集落はあるのか……距離は分からないが取りあえずはそこに行く事が当面の目標だな。
少女はそれだけ言うと球体の中に顔と手を引っ込めて浮き上がった。
……流石にもう驚く気にはなれなかった。

「それじゃあねお兄さん！」
「おう……元気でな」
「うん！お兄さんも私以外の妖怪に食べられないよう注意してね～」
「妖怪？……ああ、気を付けるよ」

黒い球体はそのままふよふよと飛んで……ボロ屋にぶつかった。
あいつ絶対前が見えてないな、何故自分の視界を奪うのか理解出来

ん……
頭でもぶつけたのか一旦高度を下げるが再び浮き上がりこちらへふよふよと飛んで来た。

「……本当に気をつけろよ？」
「う、うん……大丈夫、前が見えないだけだから」

すれ違いざまにそう言ってやると恥ずかしそうな声が返ってきた。
前が見えないだけって十分危険だろうに……やっぱコイツどこか抜けてるな、闇が視界を奪ってる事に気付いてないのか？
そして今度こそ森の方へと向かっていく彼女を見送る途中不意に重要な事を聞き忘れていたことを思い出した。

「おーい、所でお前の名前って何だ？」
「私の名前はルーミアだ［ゴンッ！］ふごっ！」
「ルーミアだな、それじゃあ……物にぶつからないよう気をつけろよ」
「うん！それじゃあねお兄さ［ゴンッ！］あべっ！」

ルーミア、そう名乗った黒い球体に包まれた少女は再び障害物にぶつかりながらも森の中へと消えて行った。

「さて、と……」

もう日は完璧に顔を出している。そろそろボロ屋の中で眠りこけている奴らを起こしてもいい頃だろう。
どのように起こしてやろうか……そんな事を考えながら俺はボロ家へと戻っていった。

人里へ

［ガサガサ……］

「ふぅ、確かここら辺だった筈なんだが……」

朝日が差し込む明るい森の中、俺はある物を探していた。
昨夜は散々な目に遭ったが今は朝日が差し込み明るい、それに鳥等の鳴き声はするものの近くに獣が居る気配はしていない……無論昨日のバケモノの気配もだ。
やはり襲ってきた時間からあいつらは夜行性なのだろう、しかし昼に襲って来ないとは限らねぇ、俺は細心の注意を払いながら森の中を歩く。

「おっ……あったあった」

俺は目的の物を見つけるとそれを拾い上げた……アサルトライフルだ。
更に近くを散策してみると見事に食い散らかされ元の姿が判別できない程グチャグチャになっているゲリラ兵と思われる無残な死体が横たわっていた。
死肉に集っている虫共に俺は顔をしかめながらも俺は兵士の持ち物……主に弾薬などを回収する。
本当は死体漁りなどしたくは無いのだがバケモノが徘徊する物騒な場所だ、念には念を、既にこいつには武器など使えないのだから拝借しても問題は無いだろう。
使えそうな物を一通り拝借し終えた後、最後に彼の遺品となりそうな物を回収し俺はその場を離れた。
無論ドッグタグなんて付けてやしないのでハンカチとか小さい飾り物……後写真とかだ。

後で纏めて生き残ったゲリラ兵に渡しとくつもりだ。
因みにその眠ってた二人のゲリラ兵なんだが……死んだように眠っててゆすろうが叩こうが起きやしなかった。
昨日の事がよっぽど精神と肉体を疲弊させていたらしい。
しかも良く見りゃあその内ひとりがあの通信兵……運の神様のお気に入りなのかねあいつは？
まあこいつらの気持ちは分からんでもないので後暫くは寝かせてやろうと思い放置しておく事にした。

……カーヴァーは起こしたけどな。幸せそうな顔でミニガン抱いて寝やがっていたので顔面を蹴り飛ばして起こしてやった。
勘違いするなよ？これがコイツの普通の起こし方だ、決して寝顔がムカついたからじゃあ無い。
そうして起こした寝ぼけ眼のカーヴァーにこの場を任せると俺は殺られたと思われる兵士達の死体を剥ぎ取……遺品の回収の為森の中に入っていった……という訳だ。

「さて、そろそろ帰る……ん？」

一時間程かけ十人程の死体を確認しそろそろ帰還しようか……と考えていた時木々の間に人影が横切ったのを確認した。
遠すぎて気配はあまり感じなかったがもしや運良く生き残ったゲリラ兵の一人かも知れない……そう思った俺はその人影が見えた所へ足早に向かった。

「……違ったか」

俺は人影から十メートル程離れた所で木の陰に隠れながら正体を確認してそう呟いた。

万一の事を考えて不用心に近づいて確認せずに良かった。
人影の正体は緑髪の少女だったんだが……こんな森の中で小奇麗な白いシャツに黒いハーフパンツとマントという姿で歩き回っているその姿はルーミアと同類だと俺のカンが告げていやがる。
彼女と同類だとすると食人の習慣があるという可能性は大だ……ここは大人しく立ち去るべきだろう。

「そろそろ姿を見せたらどうですか？そこの人間さん？」
「……バレてたか」

しかい立ち去ろうとした瞬間に声をかけられてしまった。ここはおとなしく従うべきか……
俺は両手を上げ降参のポーズをしながら木から離れ彼女の前に立った。
どうやらこちらに敵意は持っていないようだ……まあそうじゃ無けりゃこうやって堂々と姿を現したりはしないけどな。
しかし人、と言わずに人間と言う辺りこいつもやっぱりルーミアと同類の奴だな多分。
しっかし気配は完璧に消してた筈なんだがなぁ……侮れねぇなやっぱり。

「貴方はここで倒れてる人のお仲間？」

そう言った彼女の近くにはゲリラ兵の死体が数体……どれも異常な程の虫に集られていた。
というか現在進行形で死体に……と言うより彼女に惹きつけられるかのように虫がどんどんと集まってきている。
何度か腐った死体に虫が集る光景は見た事があるがこれ程までに虫が集っているのは見た事が無かった。
あんな中に立ってて彼女は平気って凄いぞ、俺でも絶対にあの状態

の死体を見つけたら理由も無く近くには寄らねぇぞ……

「まあ仲間っちゃあ仲間だな……遺品の回収をしていた所だ」

「ふぅん……」

「そいつらの遺品を回収しても？」

「ご自由にどうぞ」

そう言って一歩下がり道を開ける少女、すると兵士に集っていた虫達も一斉に死体から離れた。

彼女はもしや虫を操ってるのか？いやまさかな……しかしあり得ないとも言い切れないしな……

凄まじい羽音を立てながら黒い塊となったそれは空中に暫く停滞していると霧散し近くの木にとまった、黒い塊がこびり付いたようなその光景は生理的に嫌悪感を抱いちまう程の光景だった。

襲い掛かられたら……という嫌な予感が俺の頭の中によぎるが彼女は俺をどうこうするといった様子は見られない……しかし俺は一応警戒しながら死体に近づく。

「大丈夫、貴方を襲ったりはしませんから」

「そ……そうか」

「夜だったら襲ってたかもしれませんけどね」

「……」

俺は取り囲むように木にびっしりととまっている虫共に内心ビクビクしながらも虫が一匹も居なくなった死体から他の死体と同じように弾薬と武器を頂くと少女にもういい、と告げ死体から離れた。

すると再び大量の虫が彼らの死体に群がる。死体を覆い尽くす程の虫達は見る人が見れば失禁物の光景だろう……まあ虫が付いていなくとも腹を裂かれて臓物が飛び出し至る所を食われている死体を見ても失禁するだろうが。

「……貴方は仲間が虫に食われているのを見ても平気なんですね」
「生きて食われるんなら助けもするだろうがこいつはもう死んでんだ、虫をおっ散らす意味が無い」
「随分とドライな対応ですね……」
「現実的、または効率的な対応と言ってくれ」

俺は再び群がる虫達から目を逸らすように空を見上げて太陽の方角を見る……今は十時頃かな？
そろそろあいつ等も流石に起きる頃だろう。まあまだ寝てる事も想定してするとそろそろ起こしに行かなくちゃならねぇ時間って事だ……もし集落が歩いて半日の位置にあるとすれば時間的に再びあのバケモノ共に遭遇する可能性もある。

「それにしてもこんな山奥で大量に人間が居たなんて……異変かな？さっきも変な乗り物の近くに大量の死体を見つけたし」
「あん？大量の死体？」
「うん、見た感じ二～三十は居たかな？」

乗り物、そして大量の死体……そこから導き出される答えは一つ、政府軍の奴等だ。
通りで戦車でおっかけてきてるってのに声が聞こえ無い筈だ、バケモノに殲滅されたんじゃあ声も出せねぇからな。
彼等にはとんだ災難だっただろうがこちらとしては好都合だ、乗り物を頂ければこちらの移動が容易になる。

「行ってみますか？すぐ近くですよ？」
「ああ……頼む」

こうして緑髪の少女に先導され歩く事暫く、遠くからでも分かるシルエット……戦車を発見した。
近くに寄ってみると居るわ居るわ……数十人の死体が見るも無残な姿で地面に横たわっていた。
バケモノも結構な数がやられてるな……なんとも凄惨な光景だ事。
まあ仲間の死体がごろごろ転がってるのに良くここまで汚く食い散らかせるもんだと思いながら死体を踏まぬよう気を付けて歩く。
そして戦車の後ろで静かに立たずむ装甲車に近づき状態を確認する。

所々爪痕などが見受けられるが別段移動に支障をきたす訳では無いので無視して構わないだろう。
タイヤにも傷は見受けられず外部タンクの損傷も無い……中々いい状態だ。動かしても問題無いだろう。
……しかし装甲の所々に見られる傷……こいつに爪痕をはっきり残すとはどんな強度と斬れ味なんだと思いながら俺は空きっぱなしの後部ハッチから入る。
仲を見るとどうやら装甲車の中でも食事会が行われたらしく食い殺された二人の兵士と一人の操縦手の死体。
うち一人は砲手をやっていたのか下半身が骨と少量の肉を残し無残に食われた状態で銃座からぶら下がっていた。
中になだれ込まれてどうにも出来なかったんだな……

「いよっと……御免よ」

［ドサドサッ］

「さて、エンジンが無事だといいんだが……［チャッ！］」
俺はその死体を外に引きずり出すと操縦席に座りエンジンをかけようとした瞬間少女の物とは違う殺気を感じ俺はその方向に銃を向ける。
銃を向けた方には同じく銃を向けた人影……それは俺の良く知っている人物だった。

「……ジョッキー？」
「久しぶりですね……その名は呼ばないで下さいと再三言った筈ですが？」

そう言って銃を下げ不機嫌さと疲れが入り混じったような顔をして俺の方に近づいて来る男……女性。
彼……いや彼女の名はジョック・コルン、愛称はジョッキー。一目ではフード付きのロングコートにマスクと要所に装甲が付いたバトルスーツのお陰で性別が全く分からない奴だ。
事実俺もこいつから性別を教えて貰うまでは男だと思っていた、まあ声も中世的だしバトルスーツを脱いでも俗に言うまな……いやなんでも無い。

「［チャッ……］おい、何でまた銃を向ける」
「貴方が失礼な事を考えていそうなので頭を撃ち抜いて中を確認してやろうかと」

何で分かるんだよ。表情一つ変えていなかった筈だぞおい、カンか？カンなのか？
……昔は冗談でも銃を向けない素直な奴だったのに何でこんなにっちまったんだか。

「冗談は程々にしろよ……所で何でお前がこんな所に居るんだ？」
「政府軍に雇われてたんですよ……で、そちらはゲリラ軍にでもついてたんですか？」
「ああそうだ、そのお蔭で裏切られるわバケモノに襲われるわでとんだ災難だ畜生」
「ちゃんとした組織じゃなく個人で仕事受けないからそうなるんですよ全く……さしずめ毎度の貴方が起こした災難に巻き込まれて私が居た部隊が壊滅したんですかね？」
そう言って俺の方を見るジョ……コルン。
……仮面越しでも分かるその批判交じりの厭味ったらしい視線を止めろ、俺だって好きでこんな面倒に首突っ込んだ訳じゃねぇんだからよ……
まあしかし部隊が壊滅したってのに一人だけ生き残るとは相当なもんだ。
流石は俺の自慢の後輩と言った所だな。
「そうかもな、ちょっと手伝え……どうせ帰る手段が無くてここで立ち往生してたんだろ？」
「はぁ……」
大きなため息をつくとやれやれと言った感じで俺の隣に来るコルン。
俺がこの扱いをするのを半ば諦めているんだろう、いやはや長年無理させてたからなぁ……俺が居なくなったと言えど早々その時の時の対応が抜ける訳でもないもんだな。
［ブロロロロ……］
「よし、エンジンも異常なしだ」

エンジンがかかった事を確認すると俺は外に出て兵士の武器を回収して装甲車の中に放り込んでいく。
流石政府軍、中々装備の整った兵士達だった……武器を裏ルートで売れば今回の報酬なんぞ目じゃない程の金が転がり込むな……装甲車はどうしようか？まあ纏めて身元を隠してゲリラ共に売っぱらうってのがいいな……儲け儲け。

「悪巧みしてますね隊長」
「フフフ……安心しろ、儲けの二割はくれてやる」
「要りませんよそんな金」
「欲が無いねぇ……そこは変わってねぇか」
「随分変わりましたよ私は……それに組織も」
「ふぅん……まあ俺には関係無ぇ話だな」

あまり組織に居た時の事は思い出したくねぇ……帰りたくなっちまう。
しかし組織を抜けた身でのこのこと顔出すわけにもいかねぇからな……爺さんは元気にしてるだろうな、死んだら嫌でも情報が入って来る筈だ。
しっかし今は誰が俺の地位に居るんだか、コルンはまず無いし他の面子も……あぁ、部隊が壊滅しそうだ。
後任を誰にするか位書置きを置いておきゃあ良かったかねぇ全く……もう抜けて何年も経ってるが心残りは本当に尽きない。

「確認終わった～？……あれ？人？」
「！［チャッ…］」
「銃を下せコルン、あいつは安全だ」

草むらからひょっこり出てきた緑髪少女に銃を向けたコルンを制止

する。

「おお、終わったぜ……こいつは俺の元部下だ」
「そうですか、まだ生きてた人が居たんですね」
「……なんですかあの少女は？」
「ここまで案内してくれた奴だ、バケモノじゃねぇよ」
「そんなの見れば分かります」
「どうも……」

コルンに軽く彼女と出会った時の事を説明し、そして今の俺達の状況を説明した。

「そうですか、カーヴァーも一緒に……」
「ああ、他の奴等は知らねぇけどな」
「……やっぱりこの死体も置いて行くんですか？」
「置いて行く以外は無いな、墓穴掘ってたら夜になっちまう」
「兵士にとっては戦場が墓みたいな物ですよ」
「そう……ですか……」

俺はそう言いながらコルンに手伝わせ兵士達の武器を全て装甲車の中に運び終え操縦席に再び座る。
今や兵士が座っているべき座席には彼等の武器が所狭しと並んでいる。
そしてそれをどけて席に座るコルン……あーあちゃんと並べてたのに。
せめて自分の並べた所に座ってくれりゃあいいのに何でわざわざ奥の席に座るかねぇ……

そんな事を思いつつ最後に軽く前後に車体を動かし問題無い事を確認する……うむ、問題ない。

「……へぇ、そうやって動かすんだ」

何時の間にか俺の隣で座席を覗き込んでいる少女……興味津々と言った感じで覗き込む彼女からはやはりルーミアと同じくあのバケモノ共と同種だとはにわかには信じ難かった……が、彼女の頭をみると髪の毛では無い二本の触角……髪の毛かと思っていたが近くで見ると髪の毛と色が違う上ピクピクと動いている事から彼女が人外である事を物語っていた。

それ以外は普通の女の子と言っていい外見なんだがなぁ……

引っこ抜いたらどうなるんだろうとアホな事を考えていたら少女に呆れたような目で見られていた。

「……変な事考えてませんでした？」

「いや……別に？」

俺は彼女から目をそらして装甲車を動かす。

何故だかコルンが居る席から殺気に似たものも感じるのだが……何が気に食わないんだか、まさか隣に座りたいとかか？

……子供でもあるまいしそれは無いか。

道が整備されていない上森の中で動かし辛いが一応こいつが通れるくらいの道はあるんで問題は無いだろう。

「俺はこいつに乗って帰るが……君はどうする？」

「特に行く当ても無いから乗せて貰ってもいい？」

「どうぞご自由に」

どうやら彼女はこの装甲車に興味津々のようだ。

俺も初めて見た時には同じような反応だったな……懐かしい。

彼女にはここまで案内してもらった事だし別に断るような理由も無

いので俺は彼女を乗せたまま装甲車を発車した。
「［ガタガタッ！］うわわっ！？」
「［ガシッ］揺れるからどっかに捕まっとけ」
「あ……はい」

車体が揺れバランスを崩しかけた彼女を片手で掴んで安定させてやると彼女は俺の隣の席に座った。
しっかし何度も思うがこの操縦手席の複雑さはどうにかならんもんか……
ついでに更に強まった後部からの殺気もどうにかならんかねぇ……
俺の隣の席に座りたかった説が現実味を帯びてきたな、優しく隣に座らせてやりゃあ良かったか……

しっかしガタガタ揺れるな、こんな悪路じゃなきゃあもう少し軽快に走れる筈なんだが。
南アフリカで軍が使ってるやつを走らせた時は気分爽快だったなぁ……障害物少なかったから走りたい放題だったからなんだが。
その後依頼主に呆れ顔をされたのは言うまでもない、先輩達にも『お前はガキか！』って怒鳴られたっけか、懐かしい思い出だ。

［ゴンッ！］

「うぉう！」
「うおっと！？」
「［ガンッ！］はぎゅっ！」

……思い出に浸りすぎて前方をよく見ていなかったせいで思いっきり前方の木に衝突しちまったな。
コルンは何とか体制を保ったようだが少女はその勢いで思いっきり

頭を打ち付けたようで奇妙な声を出しながら顔を抑えていた。

「スマン、前方不注意だった」

「ふぐぐ……」

恨めしそうな目で俺を見ないでくれ誤ってるんだから……

並べてあった武器もみんな落ちて大変な事になっている……せっかく綺麗に並べたってのに……

「これなら飛んだ方が安全で早いです……」

「お前も飛べるのか？」

「うん……って誰か他の妖怪に会ったの？」

「ああ……ルーミアという金髪少女だ」

「えぇっ！？」

ルーミア、という言葉を聞いた瞬間彼女の目が驚いたように見開かれた。

あぁそうか、彼女は食人するんだったか、そりゃあ彼女と面識があって生きてりゃあ驚かれると言える……のか？

「お前はルーミアを知ってるのか？」

「あ、はい……ルーミアちゃんとはよく遊ぶので」

「遊ぶ……ねぇ……」

確かに見た目は遊びたい盛りの少女だからな、遊びの内容は一体なんであるのか知らんが。

普通に鬼ごっことかかくれんぼでもしてるのかね？それとも……いや、考えるのは止めておこう、気分が悪くなる。

そんな事を考えているとふとルーミアが言っていた“妖怪”という単語が気になった。

せっかく隣にルーミアの友人が居るのだ、聞かない手は無いと思い彼女にそのことを質問する。

「所でルーミアが“妖怪”って言ってたんだが……それはここらにごまんといるバケモノの事で合ってるよな？」

「え？はいそうですよ……って妖怪知らないんですか？」

「ああ、全く知らねぇ。良かったら教えてくれると助かる」

「そうですね、妖怪と言うのは……」

俺の何気ない質問に彼女は親切丁寧に教えてくれた。

まあ長ったらしく彼女の言った事を復唱するのも面倒くさいので簡潔に纏めると……どうやらモンスターとほぼ同意義の言葉らしい。

彼女やルーミアのように知能のある奴から獣程度の知能を持たない奴まで千差万別……一応群れる事はあるらしいが殆どは餌……人間を襲う時に集まる一時的なものらしい。

それであんな姿形が違う奴等が群れて襲ってきた訳か、通りで群れらしい動きをしなかった訳だ。

集団のレベルがマーケットで安売りの肉に群がってくる民衆と同レベルなら個々が強くても殲滅は容易い。

「所で名前を聞いてなかったな名前はなんて言うんだ？」

「私の名前はリグル・ナイトバグ、蛍の妖怪です」

「蛍？」

蛍とはどんな生き物か聞いた事は無いが名前と彼女の触角を見て俺は大方虫だろうと予測した。

一体どういう虫なのか……う～む、彼女の姿から連想するのは少し無理があるな。

「蛍を知らないんですか？」

「ああ……聞いたことが無いな、コルン知ってるか？」
「知りませんね……どういう生き物なのですか？」
「えっとですね、夏の夜に星のように沢山キラキラと光って凄い幻想的で……素晴らしい虫です！」
「ほ……ほぅ」

こちらにずい！と顔を寄せて力説するリグル。
なんでそんな気合が入っているのかと思ったが……こちらでいう国の自慢といった解釈をすればしっくりとくる。
最初の印象と言うものは物であれ人であれ知らない者に対しては最も重要な事だ。
まあ彼女の説明はなんとも抽象的ではあったが……ふむ、実物を見てみたい気もする。

「時間があればその光景を見てみたいな」
「そうですか！いつかお見せしますよ！」
「おー、期待しとく」

しかしそれでも見てみたいと言っただけで目を輝かせる程の事かねぇ……知らない人間に自慢したいって感じか？やはり子供だな……

「所で貴方の名前は？」
「俺の名前はカイナ・レイスター。姓名どっちでも好きな方で呼んでくれ」
「じゃあレイスターさんで」
「応」

そうして離しながら運転している間に視界が開け廃村に到着した。
装甲車をカーヴァー達が居るボロ家の前に止めるとカーヴァー達が出てきた。

「おーいカーヴァー！帰ったぞ！」
「あ、アニキ！？凄いもん乗って帰ってきましたね！」

どうやらゲリラ兵の二人も起きたようだ……かなりダルそうだがな。
まあ当たり前か、精神からくるストレスと肉体からくる疲労……一般人が一日で回復するのは難しいと言えるからな。
まるでゾンビのようにふらふらとボロ家から出てくるその姿はなんとも言い難かった。
俺は装甲車のハッチを開けて外に出る。

［ガチャ……］

「カーヴァー、俺が居ない間に異常は？」
「あの金髪の娘がいなくなっちまいましたアニキ！」
「あいつは飯食いに森に戻ってったよ」
「……そ、そうっすか」

あまり考えたくない、と言う風にコイツに似合わず難しそうな顔をするカーヴァー。
まあそうだよな、飯食いに森に行くって何を食いに行くんだって話だもんな……
まあ俺の頭の中でも大体予想はついているが言うべきでは無いし言いたくも無い事だ。

「おっきい人ですね……」
「そういえばアニキ、この緑の餓鬼は？」
「こいつはリグル・ナイトバグ、この装甲車の場所を教えてくれたんだ」
「そうなんですか……ってコルンさんじゃないっスか！」

後部ハッチからリグルの後に続いて出てきたコルンに驚きの声をあげるカーヴァー。
まあこんな所で出会うなんて思わないだろうしな……

「便利な足は手に入れられた、後はコイツで集落までかっ飛ばしていけばいいだろう」
「集落……人が住んでいる所があるんですか！？流石傭兵さんです！これで助かるんですね！」
「助かると決まったわけじゃあ無いが……まあバケモノに襲われなくなるって意味じゃあ助かるって言ってもいいな」

集落と聞いた途端安堵の域を漏らすゲリラ兵二人。
必ずしもお前らが思ってるような集落って訳じゃあ無いかも知れんってのに……後で落胆する事になっても知らんぞ俺は。

「まあ兎に角さっさと乗れ、こいつがあると言ってもなるべく夜は走りたくねぇ」
「分かりましたっ！」
「了解です」
「うっし、行きましょうアニキ！」

先程までの疲れた様子は何処へやら、元気になったゲリラ兵二人は足早に装甲車の中へ駆け込んで行った。
いやはや希望ってものは本当に人を強くするもんだ……さっきまでぐったりしてた奴とは思えない元気さだ。

「よ～しお前もさっさと乗れ」
「はいアニキ！」

そして外に残ったのは俺とリグルだけになった。
彼女を見てみるとどうやら死んだバケモノ……妖怪だったか？そいつをまじまじと見ていた。

「同胞の死骸を見るのは辛いか？」
「そうでもありませんよ、虫が知らせてくれましたし……それにしてもこの数をたった四人で？」
「こいつらは俺一人でやった」
「……強いんですね、貴方は」
「俺が強いってより武器が強いんだよ」

そう言って俺はアサルトライフルを肩から外しリグルに見せる。
手入れの行き届いた黒光りするそれを彼女はまじまじと見つめていた。

「それって武器だったんですね」
「ああ、時代の最先端をいく武器だ……あの中に腐る程あるから一つやろうか？」
「結構です」
「ハハハ……だろうな」

即答された……まあこちらも断ると分かった上で冗談で言った事だし真面に取られたら対応に困る。
俺は笑いながら銃を肩にかける、まあこういう奴には銃なんざ到底似合わないからな。

その後集落までの案内を頼もうとしたのだが正確な距離と方向を教えるからここに残ると言われた。
あまり集落には用も無しに近づきたくは無いらしい。まあそうだろうな、友人に人食いが居るのだから。

まあこちらとしてはそれにどうこう言う理由も無いので場所を教えてもらい彼女に礼を言うと装甲車に乗り込みエンジンをかける。

「［ブロロロロ……］そんじゃーな！」

「はい、また会いましょう！」

「ああ、出会うのが夜じゃ無い事を祈るよ」

ぺこりと礼儀正しく頭を下げる彼女を後に俺達は集落がある方向へと装甲車を走らせていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8387y/

ある傭兵の幻想郷訪問譚

2011年11月26日23時54分発行